

小説半導体戦争（八）

杉田望

8 世界会議

1

坂本支社長は先ほど秘書が届けた英文の手紙を熱心に読んでいた。宛名は日興製作所の坂本実個人になっている。それで秘書が開封せずに届けてくれたのだらう。豪華な革張りの椅子に深く座り直し、坂本は手紙をもう一度読み返してみた。

それは俯かに奇妙な招待状だった。坂本は手紙を読み終えて考え込んでいた。

半導体の技術・価格・生産・供給など互いに関心のある事項について、利害の異なる者の間で率直な意見交換を行うため当協会が主体となり、下記の要領で会合を開くことになりました。貴下を我が協会の会合に招待致します

文面はいたって簡便である。会合の主催主体は『世界経営技術協会』とあるが、坂本には聞き覚えのない組織である。署名欄にはウィリアム・スコットとサインがあった。倒産したモトラム社の社長と同名である。

会合は二月の末、タイのバンコック近郊のリゾート地パタヤビーチで開催されるとある。出席するかどうか、二週間以内にニューヨークに置かれている『世界経営技術協会』の事務局まで連絡するように指示してあった。

会合では技術・価格・生産・供給などを話し合うとある。微妙な時期に微妙な問題を話し合うものだ、と坂本は思った。ウィリアム・スコットなる人物は、どういう資格でこのような会議を提案してくるのだらう。他言無用のこと、と案内状の末尾に書いてある。どこか秘密めかしたところがある。

トップ経営セミナーであるとか、エグゼクティブ・セミナーであるとか、この種の会合の案内はよくあることで、最近ではセミナー流行である。『世界経営技術路会』なる組織も、その種のセミナー会社かも知れない。

それにしてもどこが表現に生々しいところがあり、セミナー会社の案内状にしては文面が簡素に過ぎる。利害の異なる者間で率直な意見交換を行う」と書いてある。これは意味深長な表現だ。案内状にサインをしている人物が、倒産した問題のモトラム社の社長と同姓同名であることも引つかかる。スコット社長と同一人物なのか、それとも全く別な人間であるのか。仮に同一人物であったとしたらどうということなのか。日本の半導体メーカーを目のかたきにして当の本人が丁重にも会合の案内状などをくれるだろうか。どうも考えられないことだ。世界的規模でカルテルを締結することを暗に誘ってきているような内容としても読み取れる。謀略なのか。おとり作戦の可能性もある。



坂本はふうつと窓の外に目をやった。十九階の日興製作所社長室の窓の外には本郷界隈の町並みが広がっている。湯島聖堂から神田明神の一带だけか黒ずんだ緑を残している。もう数日で二月だ。今年はいやに冷え冷えとした日が続いている。日興製作所が丸の内からここに本社を移して、十数年になる。坂本は窓の外に目を落しながら先ほどから同じことを考えている。

モトラム社が倒産して以来起こった一連の事件にはどう考えても裏がありそうな気がしてならない。政府間交渉が決裂した話を聞いたとき、今度の事件には裏がある……坂本は自分の考えに確信を待つようになっていた。日米の話合いはにっちもさっちもいかない、膠着状態にあった。

そこに意味ありげな案内状が突然舞い込んできた。ウィリアム・スコットなる人物がモトラム社のスコット社長と同一人物であったとしたら、これは絶妙のタイミングで日本に誘いをかけてきたこ

とになる。なにを狙いとする会合であるかは手紙の文面からだけでは判然としないが、一連の事件と無関係であるとは思えない。危険な匂いがする。坂本は直感的にそう思った。

会長の大竹繁夫ならばどう判断するか、そのことも考えてみた。しかし、こんなことでわざわざ大竹に相談するのもおかしい話である。それでなくとも社内における自分の評価がどうなっているか、そのことは坂本もわかつている。いつそのこと海外事業本部長の佐瀬常務に預けてしまうのも一方法かも知れない。そうも考えてみたが、秘書の返事だと、佐瀬は生憎米国に出張中だった。会合に出席すべきかどうか、自分一人で問題を処理するには些かりリスクが大き過ぎるようにも思える。坂本はあれこれ考えてみたが、結局、屑箱のなかに室内状を捨てた。

だが、案内を無視するにしては少しばかり気にかかることが書いてある。屑箱から案内状を拾い上げもう一度読み返してみた。なにかありそうな気がする。それは確信に近いものになっていた。

坂本は考え直した。ウィリアム・スコットなる人物のこと、それに会合を主催する『世界経営技術協会』のこともやはり調べてみる必要がある。出欠の態度を決めるのはそれからでも遅くはない。まず、招待主の正体を調べるのがこの場合は先決だ。それを調べるにはどんな手があるのか、思い浮かんだのはふたたび佐瀬常務の顔である。おりよく佐瀬常務はアメリカに出張中である。あの男に任せればよいではないか。佐瀬常務ならば、意を汲んで動いてくれるはずだ。そう考えると気分が楽になってきた。

「佐瀬常務の宿泊しているホテルはわかるかね。至急連絡を取りたいのだが……」

坂本は腕時計で時間を確かめてから、インターホンに向かっていった。現地時間で午後十時を少し回ったところだ。この時間だと、ホテルに帰っているはずである。

別室にいる秘書が宿泊先のホテルの電話を呼んでいる。

佐瀬卓也はむずかしい表情で考えこんでいた。坂本社長がいうように確かに奇妙な会合の案内である。

坂本社長の話だと会合を主催する『世界経営技術協会』はニューヨークに事務所を構えているらしい。いずれにしても、来週はニューヨークの予定だ。まあ、ニューヨークで確かめればよい話だ。

佐瀬は受話器を置くと、再び書類に目を通し始めた。どうも頭に入りそうにない。最近、自分でも集中力がなくなってきているように感じている。佐瀬は横腹をそうつとさすってみた。堅いしこりが感じられた。佐瀬はもう一度書類に目を通してみた。サンフランシスコのエージェントの報告では計画は順調に進んでいる。今日もそのことで、エージェントと長時間にわたって、協議をして帰ってきたところである。

東京から坂本社長の電話が入ったのはちょうどシャワーを浴びているときだった。どうも坂本社長のいつていることの意味がよく理解できなかった。が、坂本は『世界経営技術協会』なる組織が主催するパタヤビーチ・セミナーを重大視しているようだった。

「どういう組織なんですか」

「それを君に調べてもらいたいのだ」

何事につけても控え目な坂本にしては珍しくきつい口調でいった。最近の坂本は少し変わってきているのではないか。大竹会長のイエスマンから脱皮し、代表取締役社長として独自のカラーを懸命に打ち出そうとしているように見える。その坂本が佐瀬には頼もしく感じられた。

考えることすら今日の佐瀬には苦痛だった。書類を閉じると、ベッドの上に仰向けに転がり、暫く理恵のことを漠然と思っていた。佐瀬はこうやって理恵のことを、あれこれと考えているのが好きだった。

二人の将来はどうなるのか。そのことを二人で真面目に話し合ったことはない。理恵はなにも佐瀬には求めてこなかった。それが寂しく感じられる。若くただ可愛いだけの女だったら佐瀬はいくらでも知っている。それにしても、なぜ理恵なのか、自分でもはつきりとわかっていないようにも思える。だいたい女性が好きになるということは、そんなことであるのかも知れないし、女性を好きになるということはこれほど非常識で、これほどに理不尽なことではないかと思うことがある。互いの年齢の

ことや互いの立場、子供たちのこと、自分の社会的立場、考えれば考えるほど、理恵との関係は非常識である。

周囲の人々を無遠慮に傷つけていることも知っている。理恵のことを隠しだてするつもりはないが、妻もうすうすは理恵の存在に気付いているようだった。妻はそのことには敢えて触れようとはしないが、家庭には冷たい空気が漂っている。気持ちが悪く離れているのだからそれは仕方のないことだ。

佐瀬はずいぶんと危険なことを考えている自分に気付いている。それがどれほど大きなリスクを背負うことになるかもわかっている。だが、理恵の魅力には勝てそうになかった。こうなってみると、理恵のためならば、なにもかも失ったとしても惜しいとは思わない。理恵に代わるなにかがあるのか。自分を燃焼させる対象をみつけたすのは難しいことだ。

世間では佐瀬のことを大竹会長の後継者とみなしていた。一研究者に過ぎなかつた佐瀬を拾い上げ、日興製作所の経営の中枢に押し込んだのは大竹会長である。サラリーマンとしての佐瀬は確かに成功した部類の人間である。だが、それだけでは生きていく今の自分を実感できなかった。たぶん大竹会長の気まぐれ人事がたまたまそうさせただけのことではないか。巡り合わせと運である。その程度の話である。世間的な評価からいえば、佐瀬は日興製作所のプリンスであり、仕事に燃える当とされていた。

このまま一生懸命走り続ければ、此間の評判通りにあるいは社長のポストも夢ではないかも知れない。だが、そのことが自分の人生にとってどんな意味を持つというのか。実にくだらないことのように思えてくる。

佐瀬は最近になって知力も体力も気力も急速に衰えてきていることを感じている。誰もがそういう自分を感じずる時期があるのだろうか。それは理恵との出会いのころから感じていたことだった。右横腹のしこりをさすってみた。次第にふくらみをましている気がする。自分の待ち時間はあとわずかではないか……。たかが社長ポストの覇権程度の話で、残り少ない自分のエネルギーを燃焼させ尽くしてたまるか、それが正直な気持ちだった。

日興製作所の黄金時代を築き上げた大竹会長ですら歳には勝てないよう

で、語はくどくなり、昔の成功話にこだわった。とてもではないが、佐瀬は今の太田繁夫にかつての魅力を感じることができない。太田ほどの男にしてからがあの程度なのだ。まして自分のことを考えると、人生の先がみえてきているように思える。副社長の渡辺公吉がどうして、ああも焦りをみせるのか、わからない。佐瀬にはどう考えても滑稽なことだった。だが、渡辺副社長は佐瀬に対する世間の評判が気になるようだった。ことあるごとに覇権ゲームを挑んできていた。

佐瀬はすでに社長ポストの耐久レースには興味を失っている。そんなことはどうでもよい。

今度の反トラスト法違反事件は底知れぬ広がりがありそうだ。米国は日本に全面的な攻勢を仕掛けてきた。どう闘いを進めるべきか、反撃の手はあるのか。それを考えていると佐瀬は次第に興奮を覚えるのだ。

先ほどの坂本社長の話ぶりからすると、坂本も思いは同じようだ。坂本が自分と同じことを考えていたとしても、不思議と意外性はなかった。坂本は太田という重石があったために、社内では常に一流半の立場に甘んじてきたのである。これまでは社内の和合のためにそれが必要だった。その意味で坂本は自分をわきまえている。坂本は寡黙な人間だが、割合鋭い観察力を持っている。隠れた坂本の能力が、太田が衰えをみせはじめるなかで、光をおびてきている。

今度の事件には、どう考えても背後で動く仕掛人がいそうだ。だが、そう簡単に乗せられてたまるかという思いがある。相手も人間である。人間である以上、考えることにパーフェクトはない。相手は正面から攻撃を仕掛けてきた。日本の半導体メーカーのほとんどはみえない敵に恐怖し、すでに白旗をかかげようとしている。それは仕掛人にとっては筋書き通りの展開ということであろう。

佐瀬は逆のことを考えてみた。攻撃には攻撃を仕掛けることである。たぶん仕掛人は日本のメーカーが反撃に出てくることは予想していないはずである。

緻密な計算にたった陰謀ほど意外に脆いもので、計算外の事態にはとんでもない行動をとるものだ。そのときがチャンスだ、

半導体メーカーのほとんどが米国から撤退を考えているとき、佐瀬が逆で大規模な投資計画を構想してみたのはそのためである。反応は予想した通りだった。誰がリークしたのかはわからないが、日経経済新聞に投資計画をすっぱ抜かれたため、米側のパートナーがすっかりおびえてしまって、計画は挫折しそうな雲行きになっている。それは敵が動き出した証拠でもあり、その意味での反応は確かにあった。

投資計画が潰されたとしても、佐瀬は第一段階のタマを用意している。今度はそのための出張だった。ビジネス・ゲームは限りなく男の夢をかき立てるものだ。

佐瀬は考えることに疲れしてきた。どうも時差のせいだけではなさそうだった。頭の芯は燃えさかっているのだが、思考は空転を続けている。痛みを堪えるために腹ばいになってみたが、治まりそうにない。今度は、ぼんやり理恵の顔が脳裏に浮かんできた。

理恵との関係を渴愛というのだろうか。辛く切ない。が、佐瀬は迷いから逃れようとしたことはなかったし、そうは考えない。逃れようとしても所詮は逃れようがないのだ。それならば渴愛に生きることとまた、人間としての生きかたではないか。こういうことは、いくら考えてみたところで結論がみえてくる性質の問題ではない。流れに任せる以外にない。

理恵は確かに佐瀬を男として燃焼させた。理恵と過ごす時間だけが、確かな自分が存在するように思えるのだ。

その一方で佐瀬はある日突然、理恵が手元から消え去っていくのではないかと、とわけのわからない不安が押し寄せてくる。自分の腕のなかに封じこめておくにしては、理恵はあまりにも奔放に過ぎる。矛盾したことだが、自由奔放に生きる、その理恵が好きなのだ。

今度の場合もそうである。佐瀬は初めての二人での海外の旅に、歳がいもなく気持ちを弾ませていた。せつかくの機会である。サンフランシスコ

を案内するつもりであれこれ計画を練っていた。今日でサンフランシスコに入って二日目になるが、理恵とはゆっくり話をしている時間さえとれずにいた。

理恵は今度の調査のことで、忙しく飛び回っている。もう午後十一時を回っているのだが、理恵はまだ部屋には帰っていないようだ。同じフェアモント・ホテルに投宿しているのだが、友人たちの手前もあるので部屋は別々にとつてあった。それは佐瀬白身がいい出したことなのだが、今夜は後悔している。

初めての海外での仕事に理恵は夢中になって走り回っている。佐瀬のこなど、眼中にないのではないか、なんだか置いてきぼりにされたような寂しい気分になっていた。

佐瀬白身も、忙しい日程をこなしていた。日中は分刻みで駆け回っているのだ。その意味では、お互い様ということになる。

だが、今夜に限って、無性に理恵に逢いたかった。この手でしっかりと理恵を抱き締めたい。

理恵の部屋は十六階である。それがひどく大きな距離のように思える。

佐瀬は部屋を出るとエレベータに乗った。ホテルは静まり返っている。また、右の横腹がうずきはじめた。

ホテルの廊下はほの暗い。理恵の部屋を軽くノックした。

「どなた？」

理恵の声が返ってきた。ドアは厳重にロックされている。理恵は用心深くドアをわずかに開けた。いつもはきりつと結び上げているのだが、いま理恵は長い髪を肩のあたりに揺らせている。髪を長く落とした理恵は別人のようにエロチック



だった。佐瀬は無言で理恵を抱きすくめ唇を重ねた。理恵は当惑したように佐瀬の唇を受けていた。

「……どうしたの」

理恵が笑いながらいった。二人は並んで窓際に立った。今夜もサンフランシスコは晴れ渡っている。ベイ・エリアには、無数に宝石がちりばめられて、美しく光り輝いている。港に浮かぶ貨物船がときおり発光信号を送っている。二人は無言でサンフランシスコ湾の夜景に見とれていた。理恵の洗いたての髪は、少し濡れていた。佐瀬はそうつと撫でてみた。へー！ リンスの匂いかした。

「仕事の方はどう……？」

佐瀬が聞いた。

「考えていたよりひどい状態にあるみたいだわ。聞けば聞くほど、憂鬱な気分になってくるんだもの……これではアメリカには勝てそうにもない、と思うわ」

佐瀬はうなずきながら窓際の椅子に腰を下ろした。二人はテーブルを挟んで向かい合って座った。

「お二人はどうしている？」

佐瀬がきいた。

シオリは本裁判が始まるに先立ち、司法省当局が要求しているディカバリ用の資料を早急に作る必要があるとかで、昨日、急遽ニーヨークに戻っている。裕美は裕美で、特集の材料集めで忙しく駆け回っている。裕美の方はサンフランシスコ支局が取材を手助けしてくれているらしく、今朝一緒に食事をしたときも、取材は順調に進んでいるといていた。手足があるのになにかと大組織は有利なのだろう。

理恵は今度の調査報告書をどうまとめればよいか、迷っている。理恵が構想していた結論の部分は、現地での調査を進める過程で、自分が考えていたことに間違いないと確信を深めているが、問題は東京の研究調査部である。彼らは相変わらずの議論をしているようだ。

昨夜、野沢研究調査部長と電話で話したようすからすると、今度の委託

調査にどういいう提言を盛り込むかで、またひと悶着が起こりそうな気配だった。

理恵は提言の下書きを書きながら、報告をどうまとめるか、迷っていた。

牛導体に始まった日米の投資摩擦は自動車、家電製品や音響製品、金融などの分野にも飛火しそうな情勢にある。シリコン・バレーのストライキ騒ぎは日系企業がロックアウトに打って出るなど、強硬な手段に訴えなかったこともあって、デモ側は肩すかしを食らった形になっている。無策が結果として幸いしたということだ。しかし、シリコン・バレーの失業者の群れのことを考えると、まだ樂觀できるような状態ではない。懸念されることは他の地域に飛火することだ。反日の動きは全米に広がりそうな予感がする。

現地での調査を進めれば進めるほど、反トラスト法違反提訴を頂点とする一連の反日の動きには、ひとつの明確な流れがあるように理恵には思える。提言＝結論をまとめるのは例の論文を書いたロバーツ教授に会ってからにすることに決めた。いずれにしても、ニューヨークでシオリがアレンジをしてくれる手はずになっている。理恵は調査の進み具合をそんな風に佐瀬に話した。

「これはアメリカの政治的陰謀ではないだろうか、アメリカが日本を米国市場から追い落とすことを考えているのだとしたら、逆に反撃に出たらどうなるか。たぶん敵は牙をむいて襲いかかってくるかも知れない。その時に敵の正体を見ることができると。だから積極的に反撃してみようかと思っているんだ」

佐瀬はきつぱりといった。

「反撃……？」

「そう、反撃だ。いま必要なことは米国に恭順することでもないし、それでは問題の解決にはならない。日本企業が米国から撤退した後の事態のこと、つまり政治や安全保障の枠組みを含め、日米は決定的に対立を深めてしまうのではないか。それでは日米開戦になってしまう。それを避けるために、我々はこの国のマーケットに最後まで固執することが大事なんだ」

相変わらず佐瀬は強気だ。それに挑発的だった。

投資摩擦が発生するのは相手国の政治環境の変化に左右されるところが大きい。だから事態を打開できるのは結局、政治の力ではないか。まず今度のことでは、日米がどのような形で協調の枠組みを、新たに作ることも可能なのか、それを今度の調査報告の結論にしたいと理恵は思っている。いつもそうなのだが、二人の議論は良い違いをみせる。しかし、今度の事件は米国の政治的な陰謀ではないか、という佐瀬の考えには同感できる。シオリのことを執拗に尾けまわしている例の二人組の男たちもそうだが、背後でうごめいている人間がいそうな気がするのだ。今度の事件が政治的な陰謀だとすれば、それを仕掛けた人間が必ずいるはずだ。その正体を暴いてみたいとも思う。

「で、投資計画どうなっているの？」

「いや、あの計画は新聞にすっぱ抜きをやられたものだから、潰つぶされてしまった」

「そうなの……………」

「しかし、敵の正体が少しずつわかってきている。敵は正体を現わし始めている。投資計画を新聞にリークしたのは誰であるか、少しわかってきた。もうひとつはパタヤビーチで、あるセミナーを開きたいと日本のメーカーに誘いかけてきている人間がいる。これも敵が我々に送ってきたシグナルだ」

「パタヤビーチでセミナーですって？」

「そうなんだ。セミナーの主催者はウィリアム・スコットという男なんだ。

事務所はニューヨークに構えているらしい」

「まさかモトラム社のスコット社長ではないのかしら？」

「断言はできないが、その可能性はある」

理恵は驚いた顔をした。モトラム社が破産したあともスコットは引き続き代表取締役社長として残留、会社再建にあたっていることは知っている。スコット社長は日本企業を相手に私的訴訟を起こしているだけでなく、反日キャンペーンを声高に叫ぶ対日強硬派の最右翼だ。執念深く日本企業の罪状を暴き立てることに生きがいを感じているような男であり、日本にとつては厄介このうえない人物なのである。

そんな人間が日本の半導体メーカーの首脳を招待して、セミナーを開く気になるとはとても考えられないことだ。それが仮に本当だとすれば、事件の性格は違ったものになってくる。理恵には信じられない話である。そのセミナーでなにを話し合うのか。

「わからない。それを調べようと思っているんだが、そのことで君にちょっと協力してもらいたいことがあるんだ」

佐瀬は『世界経営技術協会』のこと、ウィリアム・スコットが果してモトラム社のスコット社長と同一人物であるかどうか、そのことをニューヨークの事務局に連絡をとって調べて欲しいといった。理恵には興味深い話だった。佐瀬がいうように 敵 は少しだけ姿を現わしてきているように思えてきた。

サンフランシスコでの調査はあと一日もあれば終る予定だ。予定していた人間にはだいたい会っている。二日後には再びニューヨークである。ニューヨークではロバーツ教授とは是非とも会わなければならない。それが今度の調査の締めくくりになるはずだ。

それはそれとして……『世界経営技術協会』とはどんな組織なのか、佐瀬にいわれるまでもなく、これは調べてみる必要があるだろう。それにウィリアム・スコットなる人物とも会ってみたい。ニューヨークではなにかがわかるような予感がする。少なくとも事件の輪郭だけでも掴めるのではないか。

「で、あなたは どうするの？」

「投資計画に代わる別な計画を準備中なもんで、サンフランシスコにまだ仕事が残っているんだ。東海岸にいけるのは来週になるのではないかとと思う」

「別な計画というと？」

「人買いの話さ」

「人買い？」

「そう、ヘッドハンティングなんだ、今度の仕事は。このやり方だと、まあ、投資計画のように相手を不必要に刺激するようなこともないしね。これがわが社の拠点を米国に残しておく最善の方法だと思う」

ヘッドハンティング……佐瀬がなにを考えているのか、理恵には理解できなかつた。日系企業のほとんどが米国から撤退を考えているというのに、どうも佐瀬は逆のことを考えているようだ。それが投資計画に代わる第二段階の作戦計画ということなのだろうか。それにしても次々に色々なことを思いつく男だ。まるでポーカーを楽しむかのように、次々にカードの組合せを考えている。ビジネスをゲームになぞらえ、楽しんでる風情だ。

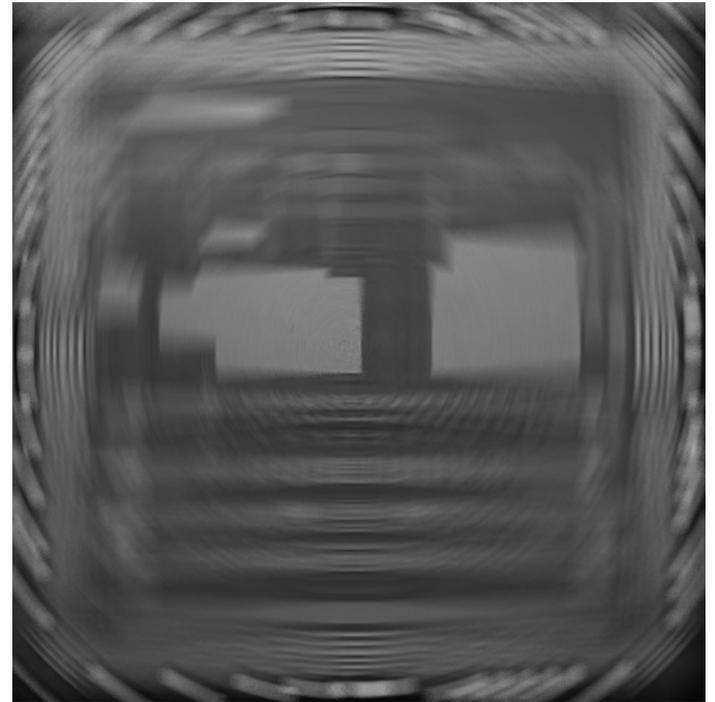
どうみても佐瀬は仕事を遊びに変える才能を持っている。それが魅力に理恵には思える。佐瀬に惹かれるところは、そういうところなのかも知れない。深い洞察力と行動力が備わっている。それだけでなく、人間としても魅力に富んだ男である。佐瀬に小説を書かせたらどんな作品を言くのか、時々理恵はそんなことを考えることがある。発想は柔軟でもとても豊かだ。新しい仕事の構想を固める前に佐瀬は、自分が考えていることを話し理恵に意見を求めるようなことをよくする。それも嬉しいことだった。けれども理恵には果てしない夢を追い続けているときの佐瀬が好きだった。

痩せてしまった佐瀬だが、目だけは生き生きと輝いている。異様な輝き方をしているようにも見える。理恵は佐瀬のことが不安になっていた。

それにしても、ヘッドハンティングとは突飛な発想である。

「アメリカでは半導体やコンピュータ業界の不況が深刻化しているので、優秀な技術者や研立者が街に溢れ出していることは、このシリコン・バレーをみて・もわかることだね。そこでだ、米国にシンクタンクを作って街に溢れたしている研究者や技術者を、そこに集めようかと思っているんだ」この作戦はいわば頭脳の買い占めだと佐瀬はいった。なるほど、ヘッドハンティング作戦とはそういうことなのか。いうまでもないことだが、日興製作所としては失業している彼らの救済を目的にそんなことを目論んでいるわけではなさそうだ。まして佐瀬のことである。シンクタンクにアメリカ人の研究者や技術者を集めてなにをやるうとしているのか。時期が時期だけに、たしかに面白い……。

「彼らを遊ばしておくわけにはいかない。AI（人工知能）チップの開発をやらせようかと思っているんだ。今後半導体はRAMに代わって、AIチップが主力になると思われるのでね」



半導体の開発競争が極小化と超高集積化にあることはよく知られていることだが、同時に半導体自体の付加価値を高めること、つまりチップ自体に情報機能を持たせることで、コンピュータのような機能を待つ半導体チップを開発することが、この業界ではもうひとつの開発テーマになっていた。もっとも各メーカーで、

マイクロプロセッサと呼ばれる半導体チップはカスタマーの個別の要求に応ずる形で、現在でも生産は行われているし、その意味で日新しい開発コンセプトではない。

AIチップというからには、その言葉通りに理解するならば、人工知能を持った半導体チップということになる。九〇年代の電子工業全体を見渡してみたとき、AIチップの開発は確かに魅力にとんだテーマである。だが、佐瀬が米国の技術者や研究者を集めて開発しようとしている半導体チップは、それとはちょっと性格の違う製品のようだ。

「だいたいの開発構想は固まっている」

佐瀬は言葉を続けた。

「製品化するAIチップは六ミリ角のシリコン基板に微細加工技術を使って、約十六万個のトランジスタを埋め込み、ここには知識を蓄えてあるRAM（随時書き取り読み取り可能メモリー）、それにAIに必要な推論のための機能、情報を蓄えるPLD（書き込み可能論理回路）など、エクスパクト・システム全体をワンチップのなかに埋め込むというのが、開発のコンセプトなんだ」

理恵には理解のできない専門的な言葉が次々に飛び出してくる。人工知能とは簡単にいって、人開に代わって色々なことを考えてくれるコンピュ

「タのことだというぐらいの知識しか理恵にはない。しかし、佐瀬はおかまいなしに話を続けている。

要するに佐瀬は理恵に計画の構想を話すことで、自分の考えが正しいかどうかを確かめているようなところがある。だからといって理恵は決して退屈しながら佐瀬の話を聞いているわけではない。わからないなりに知的な刺激がある。それに佐瀬は理恵の一方的な話もよく聞いてくれる。お互い様だった。

「ワンチップのなかに一千二百通りの推論が可能なように論理解析ルールを覚えさせておくことにするんだ。内部の情報は随時書換ができるようになっているので、情報はどんどん蓄積されるからより複雑な条件のもとでも問題解決に対応できるし、使えば使うほどチップの頭脳はさらに磨きがかかる。つまり頭が良くなるわけだ。仮に一個のチップで一秒間に二百五十万回の推論作業が可能だとすれば、これは軍事用の警戒システムにも充分使えることになるわけだ」

すでに日興製作所の研究陣の手で概念設計はでき上がっているようで、あとは各エタスパート・システムとそれに対応したハードウェアとソフトウェアの開発が残されたテーマである。AIチップをプリント基板に周辺ICと一緒に埋めこみ、そのままパーソナル・コンピュータやファクトリー・オートメーション機器に組みこんで、販売することを考えていると佐瀬はいった。AIチップの販売分野としてはやはり宇宙開発用の機器や軍事用途のように思える。

もちろんAIチップの将来性に着目して開発を進めようとしているのは日興製作所だけではない。たとえばコンピュータの巨人と呼ばれているIBM社の場合も超高速演算能力を持つメインフレームの開発と合わせて、AIチップの開発も当面最大の課題として取り組んでいる。それだけに競争の激しい分野だ。

佐瀬はAIチップの開発をするため、優秀な技術者をヘッドハンティングで確保、これを日興製作所の研究開発拠点として、米国に秘かに残すこと、それがこの戦略の狙いだと話した。大胆な構想である。

「情報の入力形式を文字や記号だけでなく映像や音声でも入力可能なもの。それにできることならば、パターン認識ができるようなものを考えてみたい」

佐瀬の夢は膨らんでいるようだ。

AIチップが注目される理由のひとつは従来のマイクロプロセッサに比べて、開発に要する時間がかかる反面、コンピュータ本体の部品が大幅に減少することと、本体のコンパクト化が図れることにある。本体がコンパクト化されることによって、従来のCPUや主記憶装置、記憶制御装置、入出力装置などがすべて同一のキャビネットに収容可能となる。それにもかかわらず演算速度、記憶容量ともに飛躍的に性能が向上する。

現在のコンピュータの開発競争では、32ビットパーソナル・コンピュータが登場によって、オフィス・コンピュータの需要が著しく侵食されることになった。同時に記憶容量の飛躍的な増大、演算速度の高速化など、大型計算機の性能を遥かに超える中型コンピュータが次々に開発されていた。問題はアプリケーションの開発だった。とくにオペレーション・システムの採用を巡っては、INBのMW・DOSにするのか、それともATC社のUNIXにするのかで、まだ決着をみていない。

これに対してAIチップを搭載したコンピュータは最初からアプリケーションに代わるソフトを搭載しているので、ユーザーは改めてソフト開発をやる必要はない。しかもここで利用する言語はほぼ自然言語に近いものを採用している。機種を目的に合わせて選択すれば、素人でもコンピュータを購入したその日からコンピュータを利用することができるわけだ。とりわけ科学技術のAIとして、あるいは医療用のAIとしての利用の可能性は大きい。このAIチップにどの程度まで汎用的な使い方を与えるのか、そこが開発コンセプトとして最も知恵を絞らなければならないところだ。「その開発を彼らに任せたいのだ。十分な報酬と研究者としての功名心を上手にくすぐれば、彼らは想像以上の能力を発揮するものだ。僕はそれに期待している」

エージェントを通じたヘッドハンティング作戦は順調のようだ。まず、作戦はコロラド州のスプリングスに本社を置く潰れかかったベンチャー会

記を買収、このベンチャー企業に対してベンチャー・キャピタルを通じて日興製作所が間接的に資金協力を行うことで基本的な話については潰れかかったベンチャー企業は全面的に衣替えを行い、ここに資金を投入してシンクタンクとしての体裁を整え、かつてINB社でAIの研究プロジェクトを担当していたエドワード・ノイス博士を引き抜いて、AIチップの開発責任者にすることも決まっている。ノイス博士は米国でもトップレベルの電子技術者である。

今回の計画に関しても、もちろん社内から異論が出てきた。今度の場合、計画そのものに反対するのではなく、ともかく現在の日米関係は悪い、関係が改善されるまで、もう少し時期を待たらどうか、という消極的な反対論である。

もつともらしい理屈を付けて計画案に終始反対を続けたのは、例によって副社長の渡辺公吉だった。ここでも佐瀬は頑張った。幸いにして、坂本社長が賛成の側に回ってくれたので、最高経営会議では計画案が最終的に承認された。

とりあえず、イチップ開発プロジェクトはノイス博士を中心に進められることになっているが、佐瀬はさらに数十人単位の技術者を新しいシンクタンクに集めることを予定しており、今度の米国出張の目的はエンジニアを通じたアタックしている人物の採否を最終的に決定することにある。仕事はまずまず順調に進んでいる。今日の段階では中核となる研究者十四名の採用を決定している。いうまでもないことだが、ヘッドハンティング作戦は極秘のうちに進められている。

「研究者の中にはモトラム社で医療用エキスパート・システムの開発にあたっていたゴウットン・グロープ博士も参加することになっているんだよ」佐瀬はAIの研究では知名度の高い何人かの研究者の名前を上げた。自らも研究者であるためか、佐瀬はAIチップの話をしているときはいかにも楽しそうだった。

理恵は佐瀬の話をこうやって聞いているのが好きだった。いましばらく、佐瀬の話聞いてやるう。喋っている内一回はたぶん社内でもごく一部の

人間しかクツナすることのできないような機密事項も含まれているのではないか。佐瀬はそんなことでも理恵に対しては平気で話をしている。

構想としては確かに面白い。理恵は窓の外に広がるサンフランシスコの夜景に目をやりながら、佐瀬の考えている詐画は果してうまくいくかどうか、と改めて思った。まず、ことを極秘のうちに進めているとはいっても、関係する人間の数があまりにも多いこと、もうひとつの問題はAIチップなるものが、そんな簡単に製品化することができるのか、それに米国では強烈な反日の嵐が吹きまわっている。仮に日興製作所の計画を今度の事件を仕掛けた連中が知るところになれば、たぶん妨害に出てくることは間違いない。それに社内にも反対派が勢力を持っているのだ。

理恵は佐瀬の考えている計画に水をさすつもりは露ほどもないけれども、幾つか疑問を口にした。佐瀬は笑っているだけだった。

佐瀬は話すことに疲れてきたようで、窓に目を移し、サンフランシスコの夜景に見とれていた。理恵は佐瀬の後ろに回るとそっと肩に手を置いた。佐瀬は理恵の方を振り返り、肩に置いた理恵の手をとり、柔らかく握った。

2

常連のメンバーが東京品川のホテルの一室に集まっていた。

業界関係者だけの集まりのようで、通産省の担当官や電子工業連合会の坂田賢治専務理事などの姿はみえなかった。今日は業界関係者のみを召集した秘密の会合が開かれているのだ。

会議の司会役を務めているのは今年度上期の幹事役である東洋電気の岩本末造常務だった。例によって、意見調整に難航しているようである。岩本常務は渋い顔をいつそう歪めるようにして話している。

「パタヤビーチ・セミナーに出席するかどうか、相手の身元も確かではないのですからこれは微妙な問題だと思います。しかし、政府間交渉も中断し、本件に関していいいますと米国とは一切の交渉の窓口が閉ざされているわけでありまして、その点を考えますと、今度の案内状を無視するわけにはいかないのではないかと、そのようにも思われるのです」



頭武志金川本部長の方に目をやった。

『世界経営技術協会』からの案内状は主要半導体メーカーのすべてに届いている。海外事業本部長の佐瀬常務が海外出張中であるため、日興製作所から今回は本島俊彦総務本部長が出席している。他社はいつものメンバーを出席させていた。日米の半導体投資摩擦を巡る話合いは、依然膠着状態にある。微妙な時期でもあるので、業界各社は協議のうえで、参加するかどうかを決めようではないかと、幹事会社の東洋電気が各社に呼びかけたことで、今日の集まりとなった。予想はされていたことだが、各社の対応はばらばらであった。各社に案内状が届いてから一週間が過ぎていた。

次第にわかってきたこと、それはセミナーの主催者はやはりモトラム社のスコット社長であること、呼掛けは日本の企業に対してだけでなく、ヨーロッパの半導体メーカーに対しても行われていること、だから案内状を無視するにはちょっとばかり厄介なことになりそうなことだった。

案内状を受け取った半導体メーカーのうち、出席の返事を早々と送り返しているのが日興製作所と松上電気の両社だった。三唱電気と目浦はまだ態度を保留している。東洋電気などは案内状そのものを無視する態度をとっていたが、最近、急遽態度を変えてきた。

要領の得ない話し方だ。それは仕方のないことである。独禁法違反裁判が進展しているさなかに奇妙な案内状が届いたのだ。が、案内状を無視するにしては些か気がかりなことが文面に記されている。どう対応すべきか、それを協議するために業界の常連メンバーが集まっているのだが、誰もがうまい知恵を出すことができずに先はどから会議は空転していたのだ。岩本常務はそこで冷えたコーヒーを啜ると、改めて会議場の片隅に座る三唱言気の鬼

それにしても、不思議な内容の案内状である。日本の企業に対して恨み骨髓のほすのスコット社長が、日本の企業と秘密裏の会合で接触を持つとして狙いは何か。誰もが気になることは案内状の文面だった。半導体の技術・価格・生産・供給など互いに関心のある事項について、利害の異なる者の間で率直な意見交換を行う とあることだ。

読み方によっては世界的な規模で半導体のカルテルを結ぼうではないか、と呼びかけているような文面だ。日本企業をカルテル行為があつたと訴えている当の本人が、世界的な規程でカルテルを結ぶことを呼びかけてくるのも、考えられないことだし、もし仮にそうだとするならば、これは謀略と考えるのが正常な判断というものだ。

だが、一方、半導体問題をめぐる米国との話合いのチャンネルは完全に閉ざされており、その間に裁判の準備はどんどん司法省の手で進められている。業界は裁判が始まる前になんとか、話合いで問題を解決できないものか、その可能性を必至になつて探つているところだった。スコット社長が主催するパタヤビーチ・セミナーに出席すべきかどうか、謀略の匂いが漂つていことはわかつていのだが、業界が迷つているのはそのためである。

議長役の岩本に三唱電気の鬼頭が促されて立ち上がった。三唱電気は出欠の態度を保留している。三唱電気が態度を決めれば、日浦も追随するはずである。業界の意志決定はなんとなくそんな風になっている。今回は不思議なことに日興製作所は早々と出席の返事を出している。

「最も恐れることは、これが 囲捜査^{おいて}の疑いがあることです。それにセミナーの主催者が問題のモトラム社のスコット社長とあつては、これは慎重にならざるを得ません」

鬼頭がいつていることは、まったくその通りだ。簡単にいつて、スコット社長は日本企業を反トラスト法違反だといつて提訴する一方、カルテル形成を呼びかけるような文面の案内状を送り付けてきているのだ。そこに衷があると考えるのは当然だ。仮にセミナーを開催する意図があるならば、あまりにも露骨な誘い方である。が、適中のビジネス感覚からいえば、まったく理解できないことではないような気もする。つまり揺さぶりをかけ

ておいてから、相手に握手を求めてくるというやり方だ。これだと、相手から有利な条件を引き出すことができるわけだ。

鬼頭は陰鬱な顔をしていたが、白分のいつていることに絶対的な確信を持っていてようだ。話を終えると、鬼頭は憮然として椅子に腰を下ろした。鬼頭はこういう種類の会合には慣れていないようだ。短く刈り込んだ髪、意匠の強さを現す角ばった顔、節くれた太い指。実直な技術者の風貌だ。

続いて日浦の長洲常務が立ち上がった。今度のセミナー出席をめぐっては三唱電気と同じくまだ態度を保留しているが、人物の比較でいえば、両者はまるで対照的である。鬼頭専務が鬱型で寡黙な人間であるのに対して、長洲は陽気で饒舌である。人間としてどちらか信用がおけるかといわれれば、やはり鬼頭専務の方だろう。今日も長洲常務は延々と喋り続けている。誰もがうんざりした顔をしているのだが、長洲自身はほとんど気にかけるようなことはない。喋っている内容は、案内状を送り付けてきた柏手の意図がわからないのだから、今回は出席を見合わせたらどうかというもので、これまで議論されたことの蒸し返しである。

「当局はこの問題にどういった判断を持たれるか、一度、伺ってみることにするのも必要かと思われるのでありますがね」

そういったのは東洋通信機の須藤専務だった。須藤専務は技術官僚出身ということもあってか、何事につけても役所の方を見ながら発言する習癖を持っている。判断を役所に頂けたらどうか、というのが発言の主旨のようである。だが、問題は案内状に 関係者以外に他言無用のこと と言かれていることである。今日、電子工業連合会の坂田専務理事や通産省の担当官を呼ばずに会合を開いたのは、実をいうと 関係者以外他言無用 と記されていたためである。

関係者とは案内状が届けられた直接の関係企業であり、通産省や業界団体の役員などは 部外者 だという暗黙の了解のもとに今日の会合は開かれている。だから須藤のいったことは、会合の持ち方に疑問を差し挟むということになる。

須藤はこういう重大なことを関係官庁に相談することなく、業界が単独で決めてしまうことに不満を持っているようだ。くどくどと、問じ主旨の

ことを喋っているが、いいたいことはひとつだけであることはわかっている。須佐はここに集まっているメンバーでは最長老であるので、みんなは黙って聞いている。が、その議論をやり始めると振り出しに戻ってしまう。議長役の岩本末造が渋い顔をして聞いている。

しかし、大勢はセミナー参加の方向に傾きつつあるかにみえる。日興製作所の本島総務本部長は終始、沈黙を守っている。議論の内容にはさしたる興味がわかないという顔をしている。

日興製作所はどういう場面でも独自の路紹に基づいて動くのが社風である。今度の場合も坂本社長が出席をあっさり決め、これを大竹会長が了承した。社内にはたいした議論もなく、セミナーへの出席が決まっただけに、ここでどうして揉めるのか、本島俊彦には不思議に思えてならないことだった。セミナーに出席することと、そこで米側となにか約束を取り交わすこととは、別の次元の話である。セミナーで米側が日本に対してなにかを要求してきたとしても、その段階で対応を考えればよいのではないか。それがセミナー出席を決めた坂本社長の判断だった。

たとえパクヤビーチ・セミナーがスコット社長が仕掛けた謀略であったとしても、それはそれなりに対応はできる。それに今回のセミナーの出席メンバーをみると、米国の有力な半導体メーカーの参加が予定されているほか、ヨーロッパの半導体メーカーも参加の予定だということではないか。

セミナーは衆人環境のもとで行われるのだ。まさかこんな場面では 囲 捜査 もあるまい。本島にはそう思えるのだが、敢えて発言は慎んでいる。いずれにしても大勢はセミナー出席の方向にあるように見受けられる。結論の見えている問題であり、あと暫くの我慢である。また再び発言を求めて立ち上がった須藤専務の横顔を見ながら本島はそんなことを考えていた。

3

ブロードウェイから東ヒューストン通りに出て、イーストリーバーの方向に向かったアペニニューAにあるチェンバレン法律事務所まで、タクシーで十五分はどたった。

広いロビーの受付でチェンバレン法律事務所が二十三階のフロアにあることを萱かめると、シオリはエレベータに乗りこんだ。エレベータは音もなく上昇を始めた。

サンフランシスコからニューヨークに帰って、二日目になる。昨日は昨日で、ワシントンで商務参事官の川越勝久と打ち合せをしてきたばかりだ。

今日はチェンバレンと次第に強硬になっていく議会対策を協議するため、チェンバレンの事務所で打ち合せを行うことになっていた。

日米事務レベル協議が昨年の末に中断して以来、米国の政府機関とは公的な交渉ルートが途絶えてしまっている。本省からは、早急に交渉再開の機会をつかむこと、そのために関係方面に強力に働き掛けを行うように指示されている。昨日の川越参事官との打ち合せも、その進捗状況を確認するために行われたものだ。

ワシントンにおける通産省の勢力は川越参事官を含め大使館に三人のほか、石油公団、新エネルギー開発機構、海外電力調査会、製品輸入促進協会等の現地事務所、東京本省からキャリアー官僚が一人ずつ派遣されている。それにニューヨーク・ジェトロに派遣されている官僚を合わせると、総勢十二名となる。今度のことでは各々の垣根を超えて、情報の収集にあたっていた。やはり注目されるのはニューヨークの産業調査員の動きだ。

豊富な資金力にものをいわせて、議会、連邦政府、各州政府、業界関係者のあいだを情報収集にかけずり回っているのが、シオリだった。本省と直接コンタクトをとる必要がある場合など、たいていは産業調査員執務室を通じて連絡を取ることになる。

シオリはサンフランシスコから戻ると、さっそく米議会関係者についてを求めて接触を試みたが、これは失敗に終わった。

一方、ワシントンの川越参事官も米国の政治家や経済界の有力者の間を精力的に動き回っているようだったが、これも大きな成果を上げられないでいるようだ。川越といえば、在米大使館勤務を命ぜられてダレス空港に着くと、前任者との引継ぎは途中の車のなかで済ませ、まっすぐ米通商代表部のビルに直行したという凄い逸話の残る男である。

通商代表部や国務省、商務省に幅広いネットワーク築き上げている。商



務省のアンドルー・スチーブソン次官補などは自他ともに川越を親友だと認めている。川越の米連邦政府機関に対する食いこみかたは相当なものである。その川越ですらも八方塞がりの状態にあるのだ。今回の協議でも目新しい情報は誰からも報告されなかった。

「本件は司法省の所行でしてね」
国務省や商務省など、いつもはなかよくつき合っている連中までがこの有様だった。ホワイトハウスにもコンタクトを取ってみたが、こちらの方は不気味に沈黙を守っている。

アイコック大統領は今度の問題をどのように考えているのか、それを探るためあるパーティの席で岡田駐米大使が接触を試みたのだが、側近に遮られて、これも不調に終わっている。

駐米大使館は事態を打開するため、いろいろと動いているのだが、どれも今のところ成果は上がっていない。在米大使館の商務担当者たちは焦りを覚えていた。

「これは開戦前後の雰囲気だ」

川越は冗談めかしていつていたが、まったくその通りである。ただ、はつきりしていることは、有無を言わず司法省は裁判の事前準備を着々と進めていることだ。

なんとか司法取引に持ちこむことができないか、最近の各種の指示や訓令から判断すると、本省の最終的な方針は、司法取引の方向で固まりつつあった。

正直いえば、シオリはまだ司法取引に関しては、疑問を持っている。第一に司法取引をするにしても、その前提となる条件の詰めをどうやってやるかである。というよりは、取引条件を米側かどのように考えているかわ

からないのだから、これは考えろということの方が無理というものである。それよりは反トラスト法違反の裁判を受けて立ち、正面から闘う姿勢を明確にすることの方が正しい政策選択ではないか。一見回り道のように思えるけれど、問題解決の本筋のように思える。しかし、これまでたとえばダンピング提訴など通商問題をめぐっては、たいていの場合、本訴に入る前に話し合いで解決してきたという経緯があるため、本省の連中は、今度の場合も話し合いによる問題解決が可能なのではないかと甘く考えている節がある。

昨日の会議でもその点が問題になった。だが、司法取引は本省の方針である以上はあらがうすべはない。ともかく議会でも連判政府でも業界関係者だろうが、誰であろうと接触を保ち米側の考えを聞き出すことが、まず先決である、というのが昨日の会議の確認だった。

来月の中旬には日米ハイテク・ワーキングの会合がワシントンで開かれる予定になっているので、日米事務レベル協議があのような結果に終わっているだけに、これはどうしても成功させなければならぬ。会議に集まった各々は悲壮感にも似た気持ちで、そのことも合わせて確認した。

今日のシオリは幾分弾んだ気持ちになっている。チェンバレンと逢うのは二週間ぶりのことだ。午前中に電話で話しかところでは裁判の準備は順調に進んでいるといった。シオリがまとめた司法省に提出するディカバリー用の資料は何しろ飛行機のなかで書き上げたものなので、幾分心配になっていたが、チェンバレンはなかなかのできたといって誉めてくれた。

エレベータはノンストップで二十三階までかけ上った。チェンバレン法律事務所はいかにも成功した弁護士事務所らしく、豪華な作りである。扉を押し開けると、右端に大きなデスクを構えた秘書が、電話の受け答えをしているところだった。分厚い絨毯が敷き詰められ、壁には新進作家の絵画が飾られている。

ようやく電話は終わった。秘書は受話器を耳に挟んだままの姿勢でシオリに椅子を薦めた。中年の女性だが愛敬があり、感じがよかった。個人的な会話はかわしたことはないが、すでに馴染みの顔である。

「伺っていますわ」

中年の秘書はそういうと、オー・エム・チェンバレンの執務室につながるインターホンを取り上げた。

チェンバレンが受付のドアに姿をみせた。口元に笑みがこぼれている。チェンバレンが先に立って、執務室に案内する。オープンスペースにはコンピュータの端末が並びに並んでいる。書類や資料はほとんどコンピュータによって管理されているらしく、弁護士事務所のスタッフたちは、コンピュータの端末で判例などを検索する作業に取り組んでいるところだった。

チェンバレンの執務室はゆったりとした作りだ。窓を背にして大きく豪華な机が置かれ、その右脇にはコンピュータの端末がセットしてある。

「少し動きが出てきたようですね」

チェンバレンは椅子に軀を沈めながらいった。チェンバレンの表情は明るい。デスクの前に置かれた豪華な革張りの椅子に座り直すと、秘書が運んできたブラックのコーヒーを口に含みながら少し改まった調子でいった。「世界経営技術協会の呼び掛けで、近く国際的な半導体メーカー経営者のセミナーが開かれるらしいんだ。招待者のリストには日本の企業も含まれている」

「セミナーですって？」

「そうなんだ」

チェンバレンの情報ネットワークは各方面に広がっている。セミナーのことは情報ソースのひとつである議会関係者から聞きこんできたものだろう。チェンバレンは今度のセミナーは東南アジアのどこかで開かれること、また、米国の主要なメーカーが参加することに加え、ヨーロッパの企業も参加することになっているほか、日本の関係企業にも案内状を発送しているといった。

チェンバレンは弁護士として、反トラスト法違反事件の裁判の準備を改める一方で、彼自身が各方面に張り巡らした情報ネットワークを利川して、事件の背景を探るため、精力的な情報収集を行っていた。が、各方面ともガードが堅く、実際困り果てていたようだ。チェンバレンは長い脚を組み直しながらいった。

「ただ、少しおかしなことがあってね」

「おかしなことというと？」

シオリが聞き返した。

「うん、主催者のことだが、例の倒産したモトラム社のウィリアム・スコット社長の名前で案内状が発送されているというんだ。ちょっとおかしいと思わないかね、彼は大の日本嫌いなんだよ」

「ウィリアム・スコット？」

「調べ直してみたので、間違いない」

「なにを話し合うというのかしら？」

「それはまだわかっていない。これから調べてみようと思っているんだ。ただ、日本の企業は疑心暗鬼になっているようで、参加に躊躇していると聞いている」

それは当然なことだとシオリは思った。なにしろ相手が問題のスコット社長であり、そのスコット社長が案内状を送ってきたというのだから、日本の関係企業が率直に誘いに応じるかどうか。経過からいえば躊躇を覚えるのもわかる。なにやらうさん臭い話ではあるが、八方塞がりの状態にある日本としては、一方ではこれが話し合いのきっかけになるかも知れないという期待もある。そこが微妙なところなのだ。

しかし、彼らはそこでなにを話し合おうとしているのか。それがわからない。これによって膠着状態にある日米の話し合いが前進するきっかけとなるか、それとも新たな難題を背負わされることになるか。それはなにを話し合いのテーマにするかによって決まることになる。

「はつきりしたことはわかっていない。ただ、半導体企業の首脳が親睦を深めるために集まるのではないことだけは確かなようだね。そのセミナーでは、日米の間に起こっている問題を含めて、半導体業界の共通した利害について話し合いが行われることは間違いないと思う」

チェンバレンはそういうと、『世界経営技術協会』が主催するセミナーのことをさらに詳しく調べることを約束した。あとは裁判の手順に関する細かな打ち合わせが続いた。ロサンゼルス地区連邦裁判所の拘留所に勾留されている黒田英俊が、近く釈放されることになりそうだとチェンバレンがい

ったことが、暗い話が続いているなかでは、唯一の明るい話題だった。

裁判の打ち合せがひとところした段階で、シオリはサンフランシスコ以来気になっていたロバーツ・ハドソン教授のことを聞いた。

「ロバーツがどうかしたというのかね」

チエンバレンは怪訝な顔をして聞き直した。

シオリはロバーツ教授が書いた論文のことやその論文が議会図書館のデーク・ベースから突如削除されたことなどを簡単に話し、一度ロバーツ教授に会って話をしてみたいといった。

「ロバーツを疑っているのかね？」

「そうではないけれど、でも一度は会ってみたいと思っ……」

「わかった」

チエンバレンはそういうと、サイドテーブルの受話器を取り上げ、コロンビア大学のロバーツ教授を呼び出すように受付にいる秘書に命じた。電話はなかなかつながらない。

暫く待たされてからロバーツ教授の秘書と名乗る若い女性の声が返ってきた。電話のやりとりをシオリは耳をそばだてて聞いた。どうやらロバーツ教授はどこか出張中で、研究室を留守にしているようだった。メッセーجزを残しておきましょうかと、秘書の声が聞こえる。来週にならないとロバーツ教授はニューヨークには戻らないらしい。

「それで結構だが、来週中に時間をとって欲しいと伝えて欲しいんだ。いや、僕じゃなくて僕が紹介する人間と会って欲しい、そういうことなんだが」

電話が終ると、チエンバレンは軽く肩を揺すってみせた。

理恵たちがニューヨークに戻るのは来週の予定だ。アポイントをもらえるのが、来週ならばちょうどいいかも知れない。シオリは礼をいうと立ち上がった。チエンバレンはシオリの肩を抱くようにして、エレベータホールまで送った。エレベータを待ちながらチエンバレンは意外なことを口にした。

「日興製作所が西洋岸で猛烈なヘッドハンティングをやっているらしい。それが、あるところで話題になっていた」

「日興製作所が？」

「そうなんだ。いずれも一流の研究者をカネにものをいわせて集めているらしい。目的がはっきりしていないものだから関係者をえらく刺激しているようだ。これが新しい紛争の火種にならなければいいんだが……」

シオリはサンフランシスコのホテルで瑞恵から紹介を受けた、日興製作所の佐瀬卓也の顔を思い浮かべた。とても魅力的な男だった。理恵が好きになるのも無理からぬことだ。あの佐瀬常務ならば、やりそうな気がする、シオリはそう思った。そのとき、エレベータの扉が音もなく開いた。

チェンバレンは笑みを浮かべながら手を振っている。扉が閉まった。エレベータは静かに下降している。シオリはチェンバレンが別れぎわにいった言葉を反復しながら、日興製作所はなにを狙ってヘッドハンティングをやっているのか、そのことを考えていた。

(つづく)